

フェローシップ・ニュース NO. 13

国際協力活動

JICA(国際協力機構)とのフィリピン・ミンダナオ島支援 視察報告

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディク
ション研究所

発行日
2005年11月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。
全国のDARCやMACの各施設、教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

フィリピン・ミンダナオ島視察報告	1
学会報告 金沢・札幌・大阪	2
入寮者からのメッセージ	3
ニューヨーク視察報告	5
アパリからのお知らせ	7

JICA草の根技術協力事業に向けた事前調査とネットワークづくりのため、近藤恒夫（アパリ副理事長）ら6名で、10月28日～11月2日にかけて、フィリピンを訪問しました。

今回は、支援対象地域であるミンダナオ島カガヤン・デ・オロ市を訪問し、カウンターパート（現地の受け入れ先）のリハビリ施設であるココーン・ファウンデーション（Coconut Foundation for Substance Abuse）のスタッフとの打ち合わせを行いました。また、カガヤン・デ・オロ市内にある他のリハビリ施設への訪問、ルソン島では、マニラ市内のリハビリ施設への訪問、NAミーティングへの参加、マニラから約60km南下したタガイタイ市にある国立のリハビリ施設(National Bureau of Investigation :NBI)にも訪問し、フィリピンの薬物事情、リハビリテーションシステム、抱える課題などについて調査いたしました。

事業実施に協力して下さる数多くの方との出会いや、フィリピンの方々の協力に感謝しながら、現在JICAへの申請に向けた最終準備をしているところです。写真を含め、本件の詳細についてはアパリホームページに掲載する予定です。そちらもご覧ください。

<視察スケジュール>

- 10/28 東京ーマニラ
- 10/29 カガヤン・デ・オロ滞在
ココーン・ファウンデーション訪問、ミーティング
- 10/30 カガヤン・デ・オロ滞在
ココーン・ファウンデーション訪問、Pathway to Recovery（リハビリ施設）見学
- 10/31 マニラ滞在
NBIタガイタイ（国立のリハビリ施設）見学
- 11/1 マニラ滞在
NAメンバーとの打ち合わせ、NA参加
family wellness center（リハビリ施設）
見学、ナラノン参加
- 11/2 午前：JICAとの打ち合わせ
午後：マニラー東京



family wellness centerにて



ココーン・ファウンデーションにて

学 会 報 告

＜日本アルコール・薬物医学会 in 金沢＞

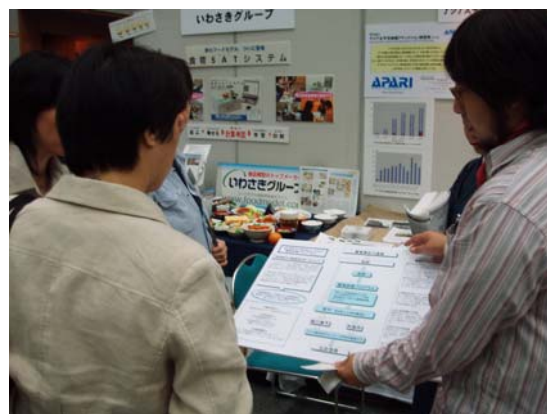
9月8～9日、金沢市で行われた「第40回日本アルコール・薬物医学会総会」において、森田展彰医師（アパリクリニック精神科医、筑波大学講師）と嶋根卓也研究員がダルクについての研究報告を行った。昨年度実施した全国ダルクを対象とした調査から森田医師が「日本において薬物依存症者の自助施設はどのように機能しているか」、嶋根研究員が「薬物依存症者の回復に向けてのニーズは満たされているか」というテーマで報告した。森田医師の報告では、ダルクは他機関にはない柔軟性（地域・反復利用・施設間移動）をもとに回復の動機付けを行い、薬物抑止に効果を上げると共に、利用者に多面的な回復を実感させていると、ダルクの有効性を訴えた。嶋根研究員の報告では、ダルクが抱える共通の課題として、①運営費の確保など経済的問題、②社会復帰する場の不足、③スタッフ不足/スタッフ研修が不十分、④精神疾患への対応、の4点を挙げた上で、1)自助施設としての機能を制限しない形での公的資金援助の必要性、2)回復者を薬物対策の人的資源として活用していくような新しいシステム作り、3)医療機関との連携強化の必要性、といった提言を行った。



アパリのブース

＜日本公衆衛生学会 in 札幌＞

9月14日～16日、札幌コンベンションセンターで日本公衆衛生学会が開催され、アパリとしては初めての「企業ブース」出展をした。アパリの他には医療関係の企業、研究所、大学、NPO団体などが参加していた。



司法サポートの説明をするスタッフ

ブースでは、プログラムの紹介、依存症についての解説、これまでの活動実績をパネル展示し、また書籍やDVDの販売も同時に行った。保健所、NGO、大学の関係者の方々が熱心にブースを見学され、有意義な情報交換をすることができた。

＜日本犯罪者会学会 in 大阪＞

10月22日～23日、大阪商業大学において、日本犯罪者会学会が開催され、アパリから3名が報告した。

近藤恒夫理事は「刑務所における薬物教育のあり方について」と題し、刑務所内では回復者との出会いを演出してもらいたいと、特に法務省関係者に向けて熱く語った。尾田事務局長は「アパリによる薬物事犯者の回復支援～処罰から治療へ～」というテーマで、ドラッグ・コートを参考にしながらアパリがこの5年間に160名以上の薬物事犯者に司法サポートを実施した経験に基づき、現行法の枠内で出来ることと出来ないことについて報告した。嶋根研究員は「自助グループを通じた薬物依存症者の心理社会的な回復について」というテーマで、ダルクでの実態調査を通じて、ダルクの有効性を心理社会的な側面から評価するためのスケールについて報告した。

＜学会報告は次号で紹介します＞

ダルク20周年 フォーラム&懇親会 DVD販売中！！

6月11日に行われた
フォーラムの様子が
DVDに収められてい
ます。

1枚 3,000円

お申込はメールか
ファックスで

FAX : 03-5830-1791

メール : info@apari.jp

ご住所、お名前、電
話番号をご記入の上
お申込下さい。

アパリ藤岡研究センター入寮者からのメッセージ

「自分の人生」 リキ (30代男性) Part,1

自分が薬を使い始めたのは中学2年の冬くらいで、最初は興味本位と友達が使えないのをいい事に優越感に浸りたかったのが使い始めでした。そのときはお酒が最初で次にタバコだけでした。そのうちに段々と使うようになり酒が数本、タバコが一日20本になりました。高校1年くらいにあるきっかけで一時期止めていたけれど高校一年の終わり頃先輩たちとつるむようになってからシンナーを使うようになりました。最初は頭がクラクラするのと頭と肺が気持ち悪くなる



藤岡のマリアさま

だけでした。でも使っていくうちに段々と気持ちよくなってきて又使うようになりました。

その頃から学校にも行かなくなり3日おきに使ってたのが、2日おきになり最後には毎日使うようになってきました。それから少しずつ幻覚を見るようになり幻聴も聞こえるようになったので怖くなり、お金がもたなくなってきたので一時期控えるようになりました。お金を貯めないと思えばバイトをするようになりました。それはまじめにやろうと思ったわけではなく薬を買うためという矛盾した動機でした。でも仕事はまじめにやっていました。それで給料をもらってはシンナーを買い使っていました。でも給料が間に合わなくなり恐喝するようになり、その金で買うようになっていきました。そのうちに足が付き警察に捕まってしまうました。バイトも首になりお金も入らなくなりました。学校も自主退学となり何もなくなってしまいました。それからはシンナーを一時期止めていました。

今度こそまじめにやろうと思ひ、またバイトを始めるよう、いろいろと仕事場を探すようになりしました。そしてやっとの思いで仕事が見つかり仕事をしました。

最初はまじめにやっていたけれど仕事が終わって友達と遊ぶようになってからは又お酒を飲むようになっていきました。それからは仕事もまじめにやるようになってきました。でも2年くらい過ぎ、仕事も一人で任されるようになってきてから、仕事のプレッシャーやストレスが出るようになってきて、又何かに頼らなくてはと思ひ酒を飲むようになりしました。

最初は仕事が終わってから一杯飲んで帰るようになりしました。そのうちに毎日飲むようになっていき、量も段々と増えて、最終的には焼酎をボトル一本飲んで帰るようになり、飲み仲間も増え居酒屋でも飲むようになりしました。毎日飲むようになりストレスもなくなったかのように思えてきました。これはいいと思ひ毎日仕事中でも飲むようになり、何かあると又飲むようになり、最後には飲まないと思ひ仕事を手につかなくなっていました。



畑作業をする仲間たち

日本テレビ 「今日の出来事」

東京本部で実施している司法サポートの活動、藤岡研究センター、家族教室の取材を受けました。年内には放映予定ですので是非ご覧ください。



天気がいいので庭で
語らい



藤岡で生まれた犬

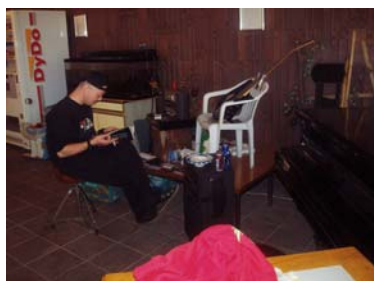
「自分の人生」 リキ (30代男性) Part,2



仲間との語り合い

でもこれはストレスのせいだと思い全然普通のことだと思っていたので気にもしませんでした。それからは毎日飲みながら仕事をするようになりました。 飲んでいるせいか仕事の仲間にバレるようになりました。それでも酒を止めようとは思わず毎日飲んでいました。結局上司にバレてクビになりました。

それからは金が尽きるまで朝から夜まで飲んで寝ての繰り返しでした。それを弟が東京の兄の所に連絡してしまい、兄がこれは駄目だと思っただけで田舎にまで迎えに来て東京の兄の家に連れていかれました。そこで仕事を探してまじめにするように、酒を控えるようにしろと言われ、仕方なしに仕事を探しました。しかしなかなか見つからず、飲みながら探すようになりました。しばらくして仕事が見つかり、今度こそはまじめにやろうと思い仕事に専念しました。それも長続きせず仕事を休みがちになり、バレないように酒も隠れながら飲むようになっていきました。



エントランスで音楽鑑賞

最初は兄にもバレなかったけれど段々と怪しまれるようになり、ごまかし続けながら飲んでいました。結局バレてしまい仕事場にもバレるようになっていきました。それでも止められず飲んでいたら兄に出て行けと言われ家を追い出されてしまいました。それからは仕事場の事務所に転がり込みました。これは懲りたと思っても中々止められず、又使う毎を送り続けました。仕事も飽き、違う仕事を探してそちらに変わっても止めることができず、とうとう止めることを諦めました。

事故で大ケガをしても直らず、施設を何回も強制退寮をくらっても止められず、結局路上生活を2週間くらいしながら暮らし、警察にパクられました。ある仲間に弁護士を世話してもらって、身柄引き受けを東京ダルクにしてもらいました。そして、そこでも止められず施設移動で今のアパリ藤岡に入れてもらい、今



施設の玄関前で施設長や仲間たちと語らう

5ヶ月目を迎えようとしています。

でもまだ使いたいと思いながら生活を送っています。いつかは止められればいいなと思いプログラムをしながら暮らしています。



今日の昼食はカモうどん

藤岡での日常風景



元ミュージシャン?の演奏に聞き入る仲間

ギャンブル・コート、ドラッグ・コート視察 IN N.Y.

報告：志立玲子（研究員）

2005年10月28日～11月4日まで、ワンデーポート（強迫的ギャンブラーのリハビリ施設）の運営委員会のメンバーでニューヨーク州にあるバッファロー近郊にある Town of Amherst Gambling Courtの視察に行ってきました。

今回日本からの視察は初めてのためか、ファレル（Farrell）判事はとても歓迎してくれ、私たちは厚いもてなしを受けました。判事と一緒に働くソーシャル・ワーカーや裁判所と契約している施設の職員の方たちとランチをとり、日本からのお土産を渡したり日本での状況を話しました。

ドラッグ・コートやギャンブル・コートの判事は民間出身で住民からの投票で選ばれています。ここのファレル判事は以前、横須賀の海兵隊にいたこともあり、日本にはとても親しみを感じているようでした。そしてカリスマ性のある人望の厚い人に見受けられました。

2001年4月にニューヨーク州アマースト（Amherst）にアメリカで初めてのギャンブル・コートができました。ギャンブル・コートと言っても実際にはドラッグ・コートもDVコートとも全て同じ裁判所でファレル判事が行っています。

そもそもギャンブル・コートとはドラッグ・コートを応用した、問題解決型裁判所の一つであり、ギャンブル依存症（強迫的ギャンブル）が原因で窃盗や横領などの罪を犯した非暴力犯の被告人に対して、刑罰を科すのではなく依存症の回復（トリートメント）を行うことを目的としています。ここでの判事の仕事は、治療や回復へ繋げる作業と、それを監督し見守る作業が中心になります。

私たちが遭遇した場面では、判事からGAへ行くように勧められたり、今までのことを日本からのゲストに向かって話すよう判事が被告人に語りかけ、私たちに向かい自分のギャンブル歴を話すという光景もありました。また、ギャンブル・コートとドラッグ・コート両方に関わっている被告人に対しては、法廷の中で薬物検査を受けさせられていました。今までのような尿検査ではなく、口の中に咥えさせるスティック状の唾液検査でした。これなら公衆の面前でも安心して検査が受けられます。結果は陰性でした。他にもアルコール検出のキットで検査を受ける者もいましたが、検出されなかったようです。

ギャンブル・コートでは約7～8人が裁判を受け、その内数名が体調不良などで欠席でした。その後引き続きドラッグ・コートが開廷され、約70名くらいが傍聴席に座り、弁護士や付き添いの家族もいるので実際には半数くらいがここで裁判を受けることになります。

法廷内に手を後ろに回して手錠をかけられた数名が現れました。裁判所の遵守事項違反者に対するサンクション（制裁）として一時的に拘束される「ホールディング・センター」という場所から裁判出席のために出てきた人たちでした。これを他の人に見せるのも戒めになるとのことでした。

裁判では一人ずつ名前が呼ばれ、判事の机の前に立ち、そこに内臓されているマイクに向かって受け答えをします。その周りには、ここに関わる専門家、リハビリ施設の職員などが待機していて必要に応じて答えていました。

判事の仕事は、ここで働くあらゆる専門家の指揮をとり、みんなを同じ方向に向かわせていく。裁くというより一つのチームになってソーシャルワークをしているといった感じでした。日本にこのような裁判所ができたとして、発想を180度転換し、民間から判事を選ぶということもいいのかも・・・とも思っていました。

現在アパリで実施している薬物事犯者に対する司法サポートをギャンブルに応用した、ダイバージョン・プログラムもワンデーポートと協力しながら、将来的にできたらとも思っています。

この視察の詳細は、来年度実施されるワンデーポート・フォーラムの報告会の中で行う予定です。

興味のある方はぜひご参加ください。



裁判所で記念撮影
後ろ中央がFarrell判事



バッファローのリス



法廷にて
(志立・滝口直子氏)



バッファロー近郊にある
Amherst Gambling Court

ARC訪問 IN ハーレム ～ ゴスペル聖歌隊を訪ねて

10月31日に一行は、ニューヨークのハーレムにあるARC (Addicts Rehabilitation Centerの略) という薬物依存症リハビリ施設を訪問してきました。昨年の暮れにはゴスペル聖歌隊「ARCゴスペル・クワイア」として来日し、六本木ヒルズアリーナでライブを行うなどし、アパリ藤岡の入寮者とも交流を図りました。

その施設に突然アポなしで訪れ、快く見学を許可され、約1時間半にわたり施設を案内されました。最初に代表のウィリアムさんの部屋に通され、昨年末の六本木ヒルズでのコンサートで感動したことを伝え、日本からのお土産と日本で掲載された新聞記事を渡しました。ウィリアムさんから、また日本に行きたいので是非招待してほしいとお願いされましたが、アパリで招待するには莫大な費用がかかるため即答はできませんでしたが、いつかまた来日しアパリやダルクの仲間など多くの方に、ゴスペル・クワイアの生の歌声を聴いていただけたらと思いました。

ハーレムは一昔前とは違い、昼間であれば観光客も足を踏み入れることもできるほど治安が回復しています。またその影にはARCも少し貢献しているのでは・・・と思います。ARCはハーレムの中だけに5つの施設を構え、入寮者は500名以上に上ります。HIV患者専用の施設、社会復帰する際に安い家賃で住むことができるレジデンスなど用途別に分かれています。そのうち3つの施設を案内されましたが、とてもハーレム?!とは思えないほどの立派で清潔な建物で驚きました。入寮費は無料で、市と民間の寄付金で賄われています。

ARCのプログラムの一つとしてゴスペルが取り入れられ、メンバーは40名ほどです。ゴスペル・クワイアは毎週水曜日の午前近くにあるバプテスト教会で歌を披露しています。NY観光の一つとしてこのゴスペルツアーも企画されています。ニューヨークを訪れた際には彼らのゴスペルを是非聴いてみてください!!

今後もアパリとのよき交流が続くことを祈ります・・・



ARCゴスペル・クワイア



ハーレムの
アポロシアターの前



ウィリアム氏とハグをする仲間 (昨年12月・六本木のコンサート会場にて)



ハーレムに点在するARCの施設



左から代表のウィリアム氏・志立・稲村氏・中村氏



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

○アパリ東京本部

〒110-0015
東京都台東区東上野6-21-8
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
メールアドレス：info@apari.jp

○アパリ藤岡研究センター

〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立をしようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に9ヶ月

【入寮費】

月額16万円(生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

編集責任者
志立玲子
平成17年11月1日発行
定価 1部 100円

＜アパリの司法サポート＞

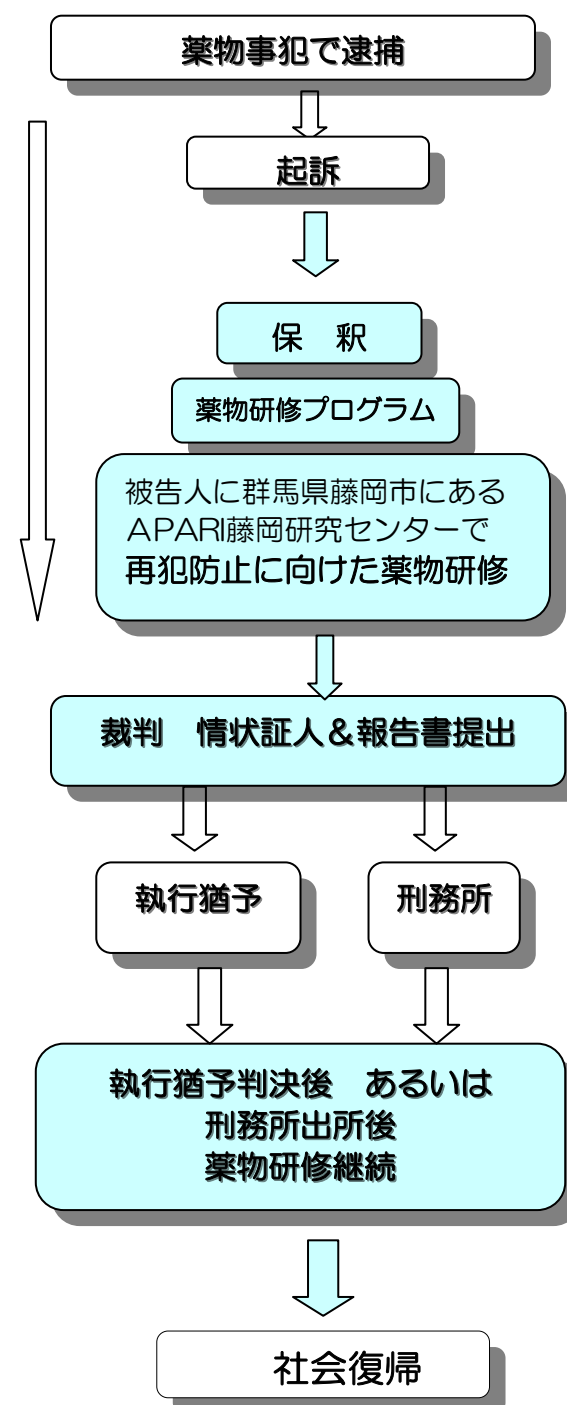
《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま 執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、初めての刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は5%以下です。最近では特に、受刑中の身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域の場合は交通・宿泊費の実費が必要です] お問い合わせは東京本部まで

アパリでの支援



＜家族教室＞

「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」

対象：薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

日時：第1・第3月曜日18：30～21：00

場所：アパリ東京本部 2階

参加費：3,000円

＜個人カウンセリング＞

対象：薬物依存症などの諸問題を抱える本人、家族など

費用：1時間1万円

場所：アパリ東京本部内

カウンセラー：川口るり子

[薬物依存症専門カウンセラー。米国薬物依存症リハビリ施設でカウンセラーとして勤務経験あり] ※英語でのカウンセリングも可能

＜アパリクリニック上野＞

医療社団法人アパリ アパリ・クリニック上野は薬物依存症専門のクリニックです。NPO法人アジア太平洋地域アディクション研究所(APARI)と連携し、保釈プログラムを利用されている方の診療や、アパリ藤岡研究センターへの往診や訪問看護も行っています。

初診日＝土曜(完全予約制)

予約は電話かメールで受け付けています。

10：00～16：00 日曜、祝日休診

＜家族相談・精神保健福祉相談＞

費用：一回 3,000円

〒110-0015

東京都台東区東上野6-21-8

電話：03-5827-1020

FAX：03-5830-1791

メールアドレス：clinic@apari.jp

<http://www.apari.jp/clinic/>

